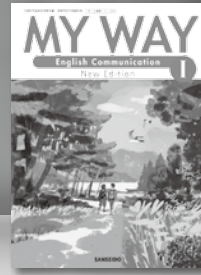




『MY WAY English Communication I New Edition』 —教科書分析の4つの論点と2つの視点—



『MY WAY』シリーズ代表著者

関西外国語大学客員教授 **森住 衛**

はじめに — 教科書の分析の論点と視点

2009年公示の高校の学習指導要領による教科書が2013年度から使われはじめて3年が経過し、その改訂がおこなわれました。小論では、『MY WAY コミュニケーション英語 I』(以下、『MY WAY I』)がこの改訂でどのようなようになったかを説明しますが、単に改訂版『MY WAY I』の紹介に終わらせるのではなく、この機会に、教科書はどうあるべきかのいわば教材論・教科書論を読者諸氏と共に考えられたらと願っています。

教科書を分析・考察そして評価する場合は、論点は少なくとも4つあります。この4点とは、題材内容、言語材料、言語活動、教科書構成です。さらに、今回のように改訂版の場合は、何を残して何を变えたかの検討も必要です。いわば、不易(変えてはならない理念)と流行(TPOに合わせて変えた方がよい工夫)の2つの視点からの検討です。小論では、これら4つの論点を縦軸に、そして、2つの視点を横軸にして、『MY WAY I』高校英語教科書論を試みます。

題材内容 — 興味の喚起と思考の促進

教科書本文の題材内容は、教科書の「魂」のようなものです。本文の題材がどのようなものであるかが、生徒の興味を喚起し、考えるきっかけになるからです。『MY WAY』は、本課本文の題材をこの他重要視してきました。それは、これが「題材の『MY WAY I』」と言われてきた所以です。

今回の改訂にあたって、第2, 3, 4, 6, 7, 10課の6つを新しくしました。これは、旧版のこれらの課の題材が不十分だったというわけではありません。どの題材にも意義があり、必ずしも変えなくてもよかったのですが、現在の日本や世界が抱えている問題、とりわけ、日本の高校生に考えてほしい「流行」と

いう点で上記の6課を変えました。

この結果、改訂版『MY WAY I』の題材の全体像は以下ようになります。各課のあとにOP(Optional Reading)としているのは、本課で取り上げた題材やジャンルを補う意味の短めの教材です。このように並べますと、本課とOPの多彩なコンビネーションがご覧いただけると思います。

【改訂版『MY WAY I』の題材】

L.1 A Story about Names (* = 新題材)

西欧諸国や中国、韓国・朝鮮、スコットランド、モンゴルなどの例にみる氏名のいろいろ

OP: Family Names in the World

いろいろな国の姓の数やその特徴

L.2 Messages from Yanase Takashi*

やなせ たかさんの『アンパンマン』にみる自己犠牲を通して、他を幸せにするヒーロー像

OP: Hope for Peace in the Moomin Series

『ムーミン』に込められた思い

L.3 Purposes of the Olympics*

東京オリンピック・パラリンピックを2020年に控えて、オリンピックの由来、意義、問題点

OP: The Slowest Olympian

世界で一番遅いマラソンのオリンピック記録

L.4 Hospital Art*

病院の壁や天井に絵を描く画家の山本容子さんを通して、近年の心をも癒やす病院の様子

OP: Rice Paddy Art

新たな絵画としての「田んぼアート」

L.5 Writing Systems in the World

古代文字、英語のアルファベット、漢字、ハングルなど世界のさまざまな文字の由来

OP: A New Style of Calligraphy

書道家・国重友美さんの「英漢字」

L.6 Washoku — Traditional Japanese Dishes*

和食が世界文化遺産になった4つの理由: 美しさ、素材と料理法、栄養価、行事との関係

OP: Hangi in New Zealand

ニュージーランドのマオリの伝統料理ハンギ

L.7 From Landmines to Herbs*

地雷原をハーブ畑に変えて、カンボジアの人たちと共生をめざす篠田ちひろさん

OP: Clearing Landmines

地雷除去に活躍する探知犬と探査ロボット

L.8 A Mysterious Object from the Past

紀元前にギリシャ沖の海で難破した船から見つかった「近代的な」機器

OP: What is This?

コロンビアの遺跡で発掘された不思議な金細工

L.9 Sesame Street

世界140ヶ国で放映されている「セサミストリート」の理念: 多様性と平等

OP: Our Hero Doraemon

世界中で親しまれている「ドラえもん」

L.10 Heritages of Beatrix Potter*

湖水地方の自然環境と歴史遺産を守った、『ピーターラビット』の作者ビアトリクス・ポター

OP: Weather Forecast for 2050

2050年の環境問題として温暖化現象の予報

この他、巻末の〈Reading〉を○.ヘンリーの‘Makes the Whole World Kin’ (同病相憐れむ) という短編に変えました。○.ヘンリーらしい伏線が敷かれた筋立てと最後のドンデン返しを楽しむことができます。

以上をまとめますと、改訂版『MY WAY I』の題材の特長は、話題の広がりや深さ、地域や時代の観点、老若男女の登場、内容の硬軟の均衡などの多様さです。特に、知的・情的に興味を喚起する題材を心がけました。さらに、ことばに関する題材が多いのも『MY WAY I』の特長です。たとえば、第1課や第5課です。第2課、第4課、第9課、第10課もことばによるメッセージ、ことばの広義としての絵画、人形劇、絵本、物語という点では「ことば」に関係しているとも言えます。「ことば」は、社会科や道徳の題材と区別するためにも、英語教育が扱うべき話題です。この視点を明確に出しているのが『MY WAY コミュニケーション英語シリーズ』の題材観です。

言語材料 — 文法と語彙の認知的指導

言語材料の代表的なものは、音、文字、語彙、文法(広義)、慣用表現の5つです。『MY WAY I』の言語教育観では、言語材料を認知的に、すなわち、生徒に解りやすく教えることを不易な方針としています。言い換えますと、しばしば外国語教育にありがちな「そのまま覚えよう」は避けています。この「習うより慣れる」方式は、母語教育や第二言語教育には適していますが、外国語教育では必ずしも功を奏しません。というより、考えないことを助長してしまいます。ことばのしくみを解りやすく説明すれば、生徒は、英語はおもしろいと思うようになり、英語嫌いはいなくなるのです。以下、文構造 / 文法と語彙の例で説明したいと思います。

まず、文構造 / 文法ですが、基礎から発展までの多彩な工夫をしています。まず、最初の〈Starter〉では、品詞の呼称や自動詞・他動詞を以下のように簡潔に説明しています。

【Starter 1. 文をつくる品詞のいろいろ】

- ① 人やものの名前を表す詞(ことば)
- ② 名詞の代わりをする名詞
- ③ 人やものの動作・状態を表す詞
- ④ 名詞の形や容姿などを説明する詞
- ⑤ 動詞・形容詞・副詞に副(そ)えて説明する詞
- ⑥ 名詞の前に置く詞
- ⑦ 文と文、語と語を接続する詞
- ⑧ 発話の間に投げ入れて感嘆などを表す詞

.....

- *他の人・ものを必要とする動詞
- *自分だけでできることを示す動詞

ここまで丁寧かつ簡潔なことばで文法を解説している教科書は希有だと思います。中学ではわからなかったことが高校で、それも、教科書で解ったというようになればと考えて編集してあります。

また、〈文法のまとめ〉でも認知的理解を試みています。たとえば、現在完了形の3用法については一般には副詞や副詞句で区別をつけていますが、同じ文が、文脈によって、3つの意味用法になることを示しています。そのために、あえて以下のような例を出しています。



We have walked for three hours.
3時間歩いたところだ。(完了)
3時間歩き続けている。(継続)
3時間歩いたことがある。(経験)

この例は、現在完了形は文脈によって完了にも継続にも経験になることを示したのですが、完了形に関する生徒の理解の一助になると考えています。

また、〈文法のまとめ〉では認知的理解の試みとして、〈to不定詞〉の説明に前置詞のtoから導入しています。到達点を示す前置詞のtoと、〈to不定詞〉の副詞用法や名詞用法のtoが暗示する「目的」や「目標」と合っているのです。これは、〈to+動詞の原形〉の「動詞の原形」が名詞概念であるということとも合致しているのです。〈to不定詞〉のtoは前置詞のtoと根源で繋がっているのだとわかることが、認知的指導を目指していることなのです。

語彙に関しては、各課の後に設けた〈Exercises〉に語彙や表現の問題を取り上げ、さらに2～3課ごとに〈Vocabulary Building〉を設けて、語彙力増強を図っています。たとえば、〈Vocabulary Building〉①では、「品詞の区別をしよう」として、品詞転換を取り上げています。これは「同じ単語がなぜ動詞と名詞になるのだろう」という素朴な疑問に答えるコラムですが、work, name, post, sleep (動詞と名詞), fast, hard, loud, deep (形容詞と副詞)を取り上げています。品詞転換は英文法の根幹に関わるのですが、中高の教科書では看過してきたきらいがあります。また、②では多義語のgetとgiveを使って、動詞のもつ根源的なイメージを解説しています。これも、生徒の「なぜ英語の単語はいろいろな意味になるのだろう」という疑問に認知的に答える工夫です。

言語活動 — Reading & Thinking 中心

言語活動は、一般にListening, Speaking, Reading, Writingの4技能を指しますが、これにThinkingを加えて、5技能になるともいえます。このThinkingは4技能の中核にある技能で、それぞれの技能と結び付いています。「コミュニケーション英語」の教科書はいわゆる総合教材ですので、このいずれも扱っていますが『MY WAY I』ではその中心をReading & Thinkingに置くことを不易としています。これは、以下の理由からです。

- ① Readingは他の技能の基礎になる。
- ② TEFL (Teaching English as a Foreign Language) ではReadingが最も効率が良い。
- ③ Thinkingを促すにはReadingが最適。
- ④ 他の3技能は英語の他の科目でも扱える。

このReading & Thinking中心の理念は、各セクション、各課のあとの言語活動に表れています。まず、各セクションでは、内容理解を促す英語のQ&AやTrue or Falseの他に、〈Read Again〉で本課本文の内容を確認しています。また、課の最後には、〈Comprehension〉として、課全体の要約に関する穴埋めの問題、さらに、その課で印象に残った段落を自分で選んで音読する活動も入れています。この音読をする活動は、自らthinkしないと答えられない活動であり、「考える」活動は外国語学習では欠かせない基本であることを改めて認識できるようにしています。

さらに、いわば「本格的」なThinkingの活動も取り上げました。〈Comprehension〉の最後にある「考えてみよう」です。たとえば、「世界の文字」を扱った第5課では、「今後、世界で新たなlettersが誕生する可能性はあるでしょうか。本文の内容にそって〈ある〉理由と〈ない〉理由の両方について考えてみましょう」としています。これはPISA型読解力の理念を応用したものです。このThinking Practiceは「アクティブ・ラーニング」を進めるのにも役立つはずですが。

また、Reading活動の極めて基本的な技術や対処法も扱っています。たとえば、〈Reading Skill〉です。この部分は旧版からの踏襲ですが、非常に「丁寧な」方法を試みています。たとえば、第1課と第3課では以下のような「スキル」を取り上げました。

【Reading Skill】

第1課 Reading Skill — 動詞と名詞

第2段落 (1.5～) を読みながら、動詞を□で囲み、名詞に下線をつけましょう。

例：Everyone has a name.

第3課 Reading Skill — 主語と述語動詞

第2段落 (1.4～) を読みながら、各文の主語を□で囲み、(述語) 動詞に下線をつけましょう。

例：Japan will host the Tokyo Olympics in 2020.

この〈Reading Skill〉では、第9, 10課のパラグラフフリーディングなど、かなりなレベルまで扱っていますが、最初は、前のような確認から始めなければいけないのです。いわゆるslower learnersは、どれも名詞か動詞かわからないからです。

教科書構成 — 全体の流れと各課の要素

教科書構成とは、教科書にどのような内容をどのような順序で盛り込んでいるか、レイアウトはどのようになっているかなど、教科書の体裁です。題材、言語材料、言語活動はいわば教科書の中身ですが、これを入れる器のようなものです。この器をどのようにするのも、教科書の見目からはじまって使い勝手に至るまで大きな影響をもっています。ただ、今回この体裁を旧版とくらべて大きく変えてはいませんので、ここでの説明は確認程度で済ませます。

(1) 教科書の全体の流れ

- 表見返し：風景
- 目次
- 本書の使い方：本文ページ、課末ページ
- Starter①～④：英語の文のしくみ — 品詞 (10品詞)、動詞 (自動詞 / 他動詞)、語順と文型、句と節
- 辞書の使い方：説明と簡単な活動
- 各課 (cf. 以下の「各課の構成」)
- 文法のまとめ、Sounds、Vocabulary Building
- Activity Corner 各①～④：2課ごとの配置
- Reading：巻末の読み物教材
- 付録：基本項目一覧表、文法項目一覧表、Idiom List、Word List (A), (B)
- 裏見返し：風景

(2) 各課の構成

- タイトルページ
- 本課本文 (左頁) とセクションごとの活動 (右頁)
- Optional Reading と Q&A
- 課末の総合練習問題

1点だけお断りしておきたいのは、〈表見返し〉と〈裏見返し〉で取り上げていた「詩」をやめて、風景からイメージした「短い文」にしたことです。詩の扱いが「重い」という実情を反映したのですが、詩がまったく消えてしまったことを残念に思っている先生方もいると思います。

おわりに — 最近の流行のとらえ方

最後にいわばこの3～4年で浮上してきた英語教育における「流行」について、どのように考えるかに触れて本稿を閉じます。

まず、大学入試にTOEFLなどの外部テストの導入の問題ですが、高校の英語教育は大学入試のためだけにあるのではないので、大々的な関与は避けるべきだと思います。教科書で多少とも意識して取り上げるとすれば「コミュニケーション英語Ⅲ」でしょう。

次に、最近、「アクティブ・ラーニング」が台頭してきました。この学び方は、機械的な練習ではなくて自ら考え、対話などを通して問題提起や問題解決を図るというものですが、このような学びは、協働学習などではすでに実践していて、なにも今に始まったことではありません。『MY WAY I』でもこのような視点を入れています。「新規な」キャッチフレーズが出てくると、それに影響されやすいのですが、しっかりと見据えて対処したいと思います。

最後に、「英語の授業は英語で」の問題です。この方針に沿って教科書の指示文などをすべて英語で書く教科書なども出ていますが、『MY WAY』ではそこまでは重視していません。そもそも、文科省は学習指導要領や解説書においても、「原則として」を付記して「すべて英語でおこなう」とは述べていません。そのようなことは大半の高校では「絵に描いた餅」であることは承知しているからです。しかし、英語の授業なので、英語でやった方が望ましい部分があります。たとえば、挨拶や問題の指示、口頭導入や口頭まとめ、その他、教室英語などです。このようなときには積極的に英語を使うようにすべきでしょう。逆に「英語で」が望ましくない場合があります。それは、文構造 / 文法の説明やことばの大切さ、面白さ、不思議さ、怖さなどの説明のときです。また、題材内容の深い読みやCritical Readingの解説をするときです。なお、学期に一度か二度はAll in Englishでおこなうことがあってもよいでしょう。これは、やればできるというデモンストラーションのためです。

以上の3つに限りませんが、「流行」が出てきたときは、それが果たして本当に新規な方針や活動なのかを考えることと、その実施にあたっては、極端に走らずバランスをとった対応をすることが必要です。